古壺新酒

第 37 号
令和６年７月１日

日本伝統俳句協会
北信越支部長
藤原　哲

題字 安原　葉
ホトトギス同人会長

軽井沢町にて（写真提供　清水順子さま）

「ご挨拶」

日本伝統俳句協会　北信越支部長　**藤原　哲**

本年一月に発生致しました能登半島地震により、被災された皆様に衷心よりお見舞いを申し上げます。また、瀬在光本、前支部長の六年間に亘る伝統俳句発展のご功績に対し謹んで敬意を表させていただきます

「新しい言葉を使うことも必要です。ただ、十年先までその言葉が使われているかどうかをよく考えて俳句を作らなくてはなりません。」これは私が稲畑汀子先生からいただいたお言葉です。近頃は、オリジナリティをだそうと無理にオノマトペを自作したり、難解な漢字を使う俳句も見受けられます。そのようなことはせずとも、苦しみや感動は一人ひとり違いますから、吟行へ出掛けても自ずと俳句は違ってくるのです。現在日本は人口減少により、何れの組織も人の不足や高齢化が顕著となっております。組織は「存在の目的」「実行する人」「伴うお金」の三つが必要となります。俳句人口は決して減少しているとは思えませんが、結社に入らない人が増えてきているように見受けられます。

日本の四季が豊かに表現でき、季節を実感できるのであれば、必要に応じて季題も増えてくるかもしれません。俳句にアルファベットを使用することも出てくるでしょう。それは決して伝統俳句を軽んじることではありません。私たちは虚子先生の提唱理念「花鳥諷詠」に常に帰り、尋ねることができます。

「有季定型」「客観写生」私たち伝統俳句に身を置く者は次世代へ受け渡していかなければなりません。「自身教人信」自ら信じ、他へも教え信じることを薦める。課題は多くありますが、伝統俳句の発展に微力ながら寄与して参りたいと存じます。

末筆ながら皆様の御健吟を念じ、ご挨拶とさせていただきます。宜しくお願い致します。

合掌

私の俳句人生

安原　葉

主な経歴
一九七三年　ホトトギス同人に推挙
一九七九年　松の花三代目主宰を継承
一九九九年　ホトトギス同人会長

ご講演（令和5年6月3日富山県俳句連盟総会）要旨

■私と父

私は現在は長岡市安浄寺の住職ですが出身は、新潟県中頸城郡春日村の光源寺（現上越市）。一九三二年に堀前家の四男として生まれ晃（こう）と名づけられた。私は間もなく九一歳となる。残された人生をどう生きていくかを含めお話ししたい。

父は信州の飯山出身。その子には恵葉、恵咸のように難しい名前をつけた。「ふるさと」を作詞した高野辰之と同郷であることを誇りに思っていた。辰之には名歌「ふるさと」がある。二〇十二年に移民百周年記念大会に出席するためブラジルへ行ったとき、約二五〇〇人の人達が、最後に涙ながらに「ふるさと」を歌ってくれた。印象的だった。

■五智吟社百周年

大正十一年（一九二二年）父が中心となり五智吟社を作った。高得点者に景品が渡される点取り句会であったが昨年十月で百周年を迎えた。昭和十六年、長兄恵葉が中国で戦病死すると、父は落胆し、中風になり五年後に他界した。次兄恵咸は昭和十九年に招集されたが、高松で終戦を迎え命拾いし、五智吟社を継いだ。

■ホトトギス六百号記念頚城俳句大会

終戦後青年団活動の一環として五智吟社の俳句会が行われた。次兄は長兄の「葉」をとって俳号を上野葉としていた。ホトトギス会員となり、名が売れてくると、私に「葉」を譲ってきた。それが俳句とのご縁ともなった。

昭和二一年九月二六日、光源寺では高浜虚子を迎えてホトトギス六百号記念頚城俳句大会が開かれた。参加者は約百名、その時の虚子の句は

野菊にも配流のあとの偲ばれて
畳替せねど掃除のよくとどき

一句目は越後が親鸞聖人の流刑の地であり、それを偲んだ句。二句目は、実家の光源寺に戦時疎開していた子供たちが多くいたので、畳はボロボロになっていた。そのことを句にした。虚子が光源寺に来たことがきっかけで、私は将来俳句を学びたいと思うようになった。

現在住職を務めている安浄寺から、来てほしいと言われ、僧籍の資格を取るため、新潟大学から大谷大学に編入学した。編入後、京大の松尾いはほ先生の元で俳句を始めた。ある寺での吟行会で、「堂縁は蟻一匹の秋日和」の句が特選となり入会が認められた。そこに虚子門下の若手リーダーの波多野爽波がいた。彼は「春菜会」を結成。毎月句会を開いて鎌倉の虚子の選を仰いでいた。私が句報の清書を担当することになった。

■高浜虚子について

ここで少し高浜虚子について述べたい。

虚子は明治七年、松山に生まれ、昭和三四年に鎌倉で亡くなった。享年八六歳。十七歳で俳句を始め、正岡子規に学ぶ。河東碧梧桐と共に、子規門下の双璧として、子規の唱える俳句革新に参加した。松山で雑誌「ほととぎす」が発刊され、虚子がそれを引継いで「ホトトギス」に改めて発行し、今年七月で一五一二号となる。

特別講演（富山県俳句連盟総会・春季俳句大会）

安原葉先生を囲んで（富山県俳句連盟総会・春季俳句大会）

■俳句は花鳥諷詠詩

昭和三年四月に大阪毎日新聞社の講演会で、虚子は初めて「**俳句は花鳥諷詠詩である**」と力説した。

花鳥風月この四文字に代表されていることを諷詠することが、花鳥諷詠詩だと言った。自然界の現象と人事界の現象を客観的に諷詠することであると。虚子は「季題」という語を終生貫き、「季語」とは言わなかった。「短い人生の中でこの一語を残せたことは誇りである」とも晩年に言っていた。

■虚子の代表句

ここで、虚子の代表句を紹介したい。

遠山に日の当りたる枯野かな（明33）
白牡丹といふといへども紅ほのか（大14）
咲き満ちてこぼるる花もなかりけり（昭3）
流れ行く大根の葉の早さかな（昭3）
天地の間（あわひ）にほろと時雨かな（昭17）
山国の蝶を荒しと思はずや（昭20）
初蝶来何色と問ふ黄と答ふ（昭21）
爛々と昼の星見え菌生え（昭22）
去年今年貫く棒のごときもの（昭25）
明易や花鳥諷詠南無阿弥陀（昭29）

■鹿野山神野寺夏稽古会

私は、昭和二九年、千葉県鹿野山神野寺で行われた二泊三日の夏稽古会に参加した。四回行われ、四回目の句会の虚子の一句が

明易や花鳥諷詠南無阿弥陀

だった。高尚すぎて誰も取らなかったがこの句が私の生涯を決定づける句となった。

星野立子主宰「玉藻」の研究座談会で虚子のこの句について、質問が出た。「花鳥諷詠は南無阿弥陀と同じと解釈してよいですか」と。虚子は「同じと解釈して結構です」と答えた。少し間をおいて、「皆さんも本当にそう思っていますか」と質問した。「勿論私たちも同じように解釈しています」と返答した。

虚子は、「怪しいなあ」と言い、「信仰しなければ単なる知識であり、何にもなりませんよ」と言った。私は、虚子のこの句に教えられ、励まされ、九十歳になった。

平成八年東本願寺勤務となり約十五年続いた。その間菩屋の稲畑汀子のもとへよく通った。平成十一年当時のホトトギス同人会長が亡くなり、稲畑汀子から、同人会長を引き受けてほしいと依頼された。六七歳の時である。

明治三十年虚子は大畠いとと結婚した。いとの姉の夫はロシア正教の伝道師であり、宗教とかかわりができた。また、幼少時から祖母とともにお寺参りに出掛けていた。明治三四年のホトトギスの編集後記に、「写生は余の信仰である」と記している。

現代は、結社に入ってまで、俳句を学びたいとは思わない人が増えている。俳句界の危機だと思っている。最近、コロナ時代を生きるには何が大切かというような講演を依頼されることが多くなり、以前より忙しくなった。カルチャー教室でも俳句を学ぶ人が減らない。「明易や花鳥諷詠南無阿弥陀」の句は私の信仰と一体となった句である。ご清聴ありがとうございました。

（富山県俳句連盟会報より）

昭和２９年７月１９日講堂にて稽古会の人たち
（千葉県　鹿野山　神野寺）

句集『明易』
第２回稲畑汀子賞

俳句を楽しむ心
＝汀子師の理念を踏まえて＝

顧問　瀬在光本

三期六年間支部長を務めさせて戴きましたが、この度藤原哲さんにバトンタッチさせて戴き安堵すると共に先行き大変心強く思っております。支部長在任中は会員の皆様からご支援ご協力頂き深く感謝申し上げます。

六年前、支部長を引き受けるにあたり汀子師が唱えた伝統俳句協会の設立理念の中にある、「物質文明の前途に不安を感じ始めた日本人が、美しい自然に調和して生きてきた、かつての日本人の心を取り戻すこれが私の心の底からの伝統俳句の薦めである。」と述べておられますがこのような心を持った伝統俳句の仲間を一人でも増やそうと運営の基盤におき務めさせて戴きました。

その一環として会報を「古壺新酒」と名称を変更し、色刷りにして外部の特に若い人にも読んでもらえる媒体に変更等をいたしましたが大きな成果を見ることはできませんでした。

最近の若者の文字離れ、言葉を伝える手段としてスマホ等デジタル機器による時代であることを考えるとインターネット俳句会なども積極的に展開する必要も感じられます。

とはいえ六年間の中で伝統俳句の仲間を増やすには結局日頃の各所で行われている俳句会（句座）の中で仲間を増やすことが唯一最良の方法だと思います。

いまの時代、俳句をやってみたい人はたくさんいます。日頃私たちが俳句（句座）を楽しんでいればおのずとそこに仲間は加わってくると確信しております。先ずは自分自身のために俳句を楽しみ、そして仲間を増やしていきたいと考えているところです。穏やかな心で自然に、そして人事に接するこの俳句の心を少しでも、複雑になりつつある昨今世の中の安寧につながることを期待しつつ引き続き俳句を楽しんでいこうと思っております。

各支部活動報告

第32回芭蕉祭
山中温泉全国俳句大会

令和5年9月16日

第三十二回芭蕉祭山中温泉全国俳句大会が、山中座に於いて五十八名の参加を得て開催された。秋晴の下、栢野の大杉、鶴仙渓、芭蕉の館、医王寺など思い思いに吟行した。（抜粋）

☆当日句（あらうみ誌友分）

西田梅女選

特選　引き戸開く苔襖せ露の芭蕉堂　正藤　宗郎

関戸美智子選

特選　秋の蚊を均す瀬音や翁径　西田　梅女

☆応募句（あらうみ誌友分）

安原　葉選

最優秀賞　俤を重ねて仰ぐ月涼し　辰巳　葉流

特選　浮島のごとき街並夏の霧　大橋美代子

「奥の細道」つるが芭蕉紀行
第20回全国俳句大会（福井）

令和5年10月29日　於・プラザ万象

☆兼題の部

杖措の賞　一村を沈めて湖の良夜かな　宇都宮市　阿久津勝利

福井県知事賞　たましいの遅れて歩く酷暑かな　福井市　田島恵子

敦賀市長賞　高跳のバー一つ上げ雲の峰　福井市　廣瀬利男

日本伝統俳句協会北信越支部長賞　原発の海にも月の道のあり　鯖江市　岡田和子

日本伝統俳句協会北信越支部
石川県部会研修会

令和5年8月4日／於・石川県文教会館

令和五年度の手記の研修句会が、あらうみ会の例会を兼ねて、開催され、連日の猛暑の中三十七名の参加者を得た。今回は、「駒形隼男先生と語る」と言うトーク形式で、あらうみ誌千号に向けての励ましのお言葉をいただいた。（抜粋）

森田康夫選並びに作句

日の眩し足のふらつく猛暑かな　守作　青暢

広大な園に炎天容赦無く　中村　直美

蟬時雨遠くうねりのやうに聴く　鈴木　恵子

風と雲少し秋めき城の庭　宮村　啓子

本殿に蘭草の香り新しく　西田　梅女

城址の木立につなぐ法師蟬　西　登美枝

石垣の日の斑にもつれ秋の蟬　村本寿美枝

炎天下白の眩しき吉城の景　金子　慶一

細くとも片陰拾ふ街歩き　同

ふと頬に触れし朝風秋めけり　村本寿美枝

水音の涼風来る句碑の丘　森田　康夫

西田梅女選並びに作句（○印は特選）

○晩夏の蟬神門くぐる辺りから　花崎　孝子

○街燃ゆる秋の欠片も感ぜざる　吉田　正則

○句碑の辺の至福の風に会ふ晩夏　大橋美代子

○汀子句碑訪ひ得て涼し研修会　中村　曜子

○汗拭いて拭いて旅人城下歩す　高橋真理子

○濃き木陰晩夏の蝶のその奥へ　花崎　孝子

○木陰美し極暑忘るる句碑の丘　篠島　安子

○地球沸騰化ともいふ極暑かな　西野久仁夫

○ホ句学ぶ熱き心や汗涼し　大橋美代子

○何もかも焦げつきさうな油照　篠島　安子

句会へと猛暑を突いて来し覚悟　西田　梅女

日本伝統俳句協会北信越支部
令和五年　私の一句

新潟

絶妙な添水の間合年尾の忌　桑原たかよし
春愁やこの家に別れ惜しむ日々　勝山　學
俳諧に心奪はれ老涼し　安井　里子
茄子の花無駄花無しと聞きたるに　佐藤　美春
山の風暑さ知らずと言ふ暮し　藤井　敏子
偲ばるる師や惜春の一番機　安原　葉
バレンタインデー雪解の水が雪解かし　田代　草猫
雪解けのありて雪国捨てられず　板垣　柳子
空也忌や踊り狂ひて見しものは　林　惣峰
爽やかに景引き寄せて入港す　橋詰シズエ
汀子忌や晴れをんなとて良き日和　小川のぶこ
暖かき土に鍬勁く老ひとり　関口　智美
牡丹の花重さうで崩れさう　佐藤　文子
豪雪に耐へて蠟梅咲きにほふ　内藤　孝
うららかや九十九島を巡る旅　大矢あきこ
背丈越す雪割られあり向拝口　小川　則子
宇宙より戻りし種の植田かな　藤原　哲

富山

霜月の快速に乗る黒い服　畑中あづき
向日葵や和平を祈り空仰ぐ　武田　律子
総会のあと天ぷらの蕗の薹　田上眞知子
駒返る草農道の石浮きて　岩崎　晃嗣
新聞紙兜に変わる子供の日　坂井一二三
蓮開く微かに己が身を揺らせ　片桐　久恵
一粒を食めば懐かしサクランボ　堀地　翠
福野縞伝承せんと機始　有川　寛
黒部川岩に張りつく残暑かな　佐野　皐月
荒梅雨や川音高き村社　平野　孝純
落花浴び莫座一枚に憩ひけり　稲田　節子
あたたかや本願力といふ他力　高城　玲子
茶道具を譲り受けてや年の暮　中島　兎女
踏み締めて踏み締め歩く木の実道　坂本　雪峰
数へ日の独りふらりと海を見に　北川　秀子
常盤木の葉擦れの音も雪もよひ　宇波可津志
剱岳初冠雪の影正し　林　智子
グリルからはみ出す尾鰭初秋刀魚　板倉　栄子
アレ祝ふ黄色い声の夜長かな　井上　大輔
暖かや犬が歩調を合わせくれ　荒木　陽子
蛍烏賊漁了へ立山の稜明くる　荒木かづを

石川

凍蝶の最後の舞を見てしまふ　中村　珠栄
稜線を鷲づかみにして秋の雲　瀬古　祥子
風少し揺れてるやうな月涼し　辻　文江
み仏に語る近況カーネーション　石名坂房枝
蹲の音の幽かに涼しかり　北川まつ子
夏の夜の漆黒の果て一等星　福島　広秋
荒れしまま無縁の墓や夏薊　松田とも子
海風に翼合はせて鳥帰る　金子　慶一
島影に漁る舟や夏の月　宮下　末子
一周忌夫と愛で来し花ポピー　松本　慶子
蛙鳴き出して見えきし星の数　小島　藍女
信号の向こうの空の夕立晴　田中　裕女
室堂のこぼるる様な星月夜　荒谷みえ子
雲の峰誰彼と無く似てをりぬ　中川外代子
本降りとならず上がりし花の雨　篠島　安子
何処駆るも能登街道の懸かり藤　梶井より子
更衣色濃く塗りてみるルージュ　岸本佐紀子
夏草に埋れダム湖の離村の碑　駒形　隼男
海原へ向きて帰燕の風に乗る　牧野　妙子
茶屋街に響く一管寒稽古　吉田　正則
一つ灯に趣味は違へど長き夜を　矢木　桂子
慕ふ人絶えず涼しき汀子句碑　中村　曜子
丘晩夏追慕果てなき汀子句碑　金谷　優子
万緑に手繰り寄せられ山中へ　白根　寿子
露草の径も虚子の散歩道　橋本紀美子
つと消えてはじめて鳰とわかる距離　田辺　国和
裏庭の静かな景や竹の春　熊野　雅子
夭逝の父との時間墓参　森田　康夫
机島遥かに置きて浮寝鳥　宮田也寸子
薔薇似合ふ募る思ひ出師の笑顔　早瀬　貞子
大漁や浅瀬に傾ぎ若布刈舟　堀口　紀子
百の音に包まれて売る風鈴屋　北　重子
雨の色足して若葉の盛り上がる　小幡　道子
公園の景色となりし朴落葉　川口　俊子

そばにゐるだけで暖かなりし人　西田　梅女
何食はぬ顔して戻る猫の夫　西田さい雪
これ以上なき晴汀子忌の朝　水橋眞智子
車道へと飛び出す子栗鼠夏木立　中村　礼子
とんぼ来る好いて好かれて鍬の先　松田　勲
糸蜻蛉小川の音に揺れてをり　辻　美智子
早春の木々は孤独を解き初む　仲谷美枝子
霾や漁火茫と日本海　西野久仁夫
日向水仰け反るほどの熱さかな　中川　茂子
句碑の辺へ常盤木落葉積む径　西　登美枝
来し方は言葉少なに生身魂　出島　達子
数々の子との思ひ出星月夜　村上　秀吾
水禍乗り越えし一村稲の花　向　佐ち子
やはらかに時刻みゆく酔芙蓉　鈴木　恵子
待春の光を弾く森の朝　村本寿美枝
俯瞰する一揆の里や青田風　松本　洋美
掃苔のこころの奥に墓じまひ　橋本　正乃
いくたびも語りて飽きず能登虚子忌　谷口由美子
水量も音も厳か神の滝　松本　寿憲
夜食とる一人ラーメン音たてて　守作　青暢
田の神を送り奥能登いよよ春　中野　幸枝
蔓先の揺れて揺れざる鉄線花　岩本　松江
穏やかに繰り返す波夕月夜　八百　惠子
若鮎の群れ水光る水香る　伊東弥太郎
月見草開き能登岬夜明けたる　永井佐和子
盛り上る天より聞こゆ虫の声　坂本　雪峰

早春の本屋に絵本あいうえお　折橋紀与美
犀星のみち川風と月と歩す　高橋眞理子
露晴れて日差し眩しき潟日和　中田　康子
秋空を見上ぐ殉難乙女像　宮村　啓子
冬晴といふは心も晴れわたり　堀口　道子
風鈴の音を操りて軒の風　中村　直美
戒律の作務に七堂黴置かず　長徳谷とし
虫の音や星の煌めく露天の湯　正藤　宗郎
師の御霊月下美人の香に満ちし　赤島磨智子
申し分なき海の日の日射濃し　松下　薫
どこにでもある物種を買ふも旅　大橋美代子
俤を重ねて仰ぐ月涼し　辰巳　葉流

福井

風鈴を止めてと泣きし娘の忌日　奥　清女
梅雨迎ふ柏翠館のたたずまい　高畑　和子
句を展じコーヒーの杯揚ぐ秋日　岸本　幸子
地獄より来る精霊の祖もあらん　山岸世詩明
夫偲ぶよすがとなりし遠蛙　山口やすか
焼鯖のけむりぼうぼう半夏生　堀なでしこ
老木の洞のなぞめき五月闇　為永香月枝
虚子偲ぶ東尋坊を打つ卯波　田野井かづを
砂利ひとつ濡れて夕立のはじまりぬ　木幡　嘉子
椿てふ呪縛の解けて椿落つ　村上　雪
音も無く傷も付けずに流れ星　多田みす枝

長野

労りて妻の手を引く木下闇　勝山　學
夏霧や牛のまなこを濡らしゆく　鈴木しどみ
千曲川へと棚田千枚落し水　牧野　菊生
湖ほとり朝餉の煙キャンプかな　岡山　幸子
摺り足の僧のおつとめ明け易し　井出　節子
伎芸天師の句飾りて偲ぶ春　西本　ゆき
巣箱掛け一喜一憂二人かな　清水　順子
新作のパンの味はひ涼新た　丸山　ま美
犠牲者の多し怒りの震災忌　宮澤　澄明
風の道ありて野梅の香かな　川崎　繁子
単線の窓すれすれに茂みかな　松本れい子
三台の扇風機廻し句会かな　宮澤　正
猛暑なり命かぎりの目高の子　佐藤ゆきな
新緑に攻め込まれたる古戦場　小林　貞子
詠みたきは虚子の句ざわり椿寿の忌　瀬在　光本

群馬

箒目の整ふ庭やめだか鉢　吉田　洋子

古壺新酒第36号訂正
（正）山頂の空奪ふかに赤蜻蛉　清水　順子
（誤）山頂の空奪ふかに透き通る

募集

私の一句

各県部会でまとめ会報編集の富山県部会へ送ることになりました。
投句締切・九月末日まで

お知らせ

○虚子生誕一五〇周年記念
「第35回全国俳句大会」

期　日　令和6年9月14日（土）
場　所　長野県軽井沢プリンスホテル
講演会　10時30分～11時30分
演　題　「虚子」自伝を詠む　岸本尚毅
参加料　10，000円
（句会・講演会・昼食・飲み物含む）
吟　行　（自由）9月13日
小諸市虚子疎開地与良町周辺
投句用紙　「花鳥諷詠」誌に折り込み

○第78回虚子記念姨捨観月句会

期　日　令和6年9月18日（水）
場　所　十時～十七時
連絡部署　長野県　千曲川姨捨　長楽寺
長野県部会　鈴木しどみ

○研修句会「能と俳句について

期　日　令和6年6月7日（金）
場　所　金沢市　県立図書館
連絡部署　石川県部会　森田康夫

○「虚子」に学ぶ伝統の俳句教室

毎　月　第三日曜日　午後一時から
会　場　富山県教育文化会館

○「奥の細道」つるが芭蕉紀行
第21回全国俳句大会

日　時　令和6年10月13日（日）
会　場　敦賀市　プラザ萬象
連絡部署　福井県部会　山岸世詩明

教室・講座　ホトトギス俳句教室
募集/県教育文化会館/毎月第3
日曜13時～☎090-2370-1153

令和６年度 日本伝統俳句協会　北信越支部 役員会 報告

日時：令和６年５月21日（火）
会場：上越市　ミュゼ雪小町
下記議事案件につきまして全会一致で承認されました。
第１号　令和５年度事業報告・決算報告（会計監査報告）について
第２号　令和６年度事業計画（案）・予算（案）について
協力金の値上げ（一口2,000円→一口3,000円）について
第３号　令和６年度支部役員の改選（執行部交代）及び
各県役務分担の変更にについて
（１）　支部長・事務局長・会計　　長野県　→　新潟県
（２）　会報「古壺新酒」編集・発行　　新潟県　→　富山県
（３）　「私の一句」　取り纏め　　富山県　→　各県部会

日本伝統俳句協会北信越支部 令和５年度決算及び令和６年度予算

決算（自　令和５年４月１日～至令和６年３月31日）
予算（自　令和６年４月１日～至令和７年３月31日）

１．一般会計

（単位：円）

令和5年度決算			令和6年度予算	
収入の部			収入の部	
項　目	決算額	備　考		備　考
前年度繰越金	696,069		674,905	
利　息	3		3	
協力金	631,000	2000円×315.5	630,000	
合計	1,327,072		1,304,908	
支出の部			支出の部	
会報発行費	158,031	会報36号発行	160,000	会報37号発行
協力金振込手数料	251,000	ゆうちょ銀行へ	30,000	ゆうちょ銀行支払
事業報告会及び研修会費	150,000	各県部会へ補助(注)	150,000	各県部会へ補助金(注)
事業協力費	10,000	姨捨句会	20,000	姨捨、山中、敦賀句会
会議費	236,540		180,000	役員会等
情報関連費	0		50,000	WEB会報費用
事務費	57,496	郵送料ほか	70,000	郵送料ほか
予備費	15,000	入会補助金3名	50,000	入会補助金
記念事業積立金			150,000	新規
小　計	652,167		860,000	
次年度繰越	674,905		444,908	
合　計	1,327,072		1,304,908	

（注）各県部会への内訳：新潟３万円、長野３万円、富山２万円、石川５万円、福井２万円　計１５万円

２．記念事業積立金

一般会計とは別に全国俳句大会準備金として1,283,913円積立あり。
※R6.9.14に軽井沢で開催の、第35回全国俳句大会で100万円程度の支出が見込まれる。

日本伝統俳句協会
北信越支部への協力金
（二〇二三年度）［一口二千円］

ご芳名および口数　　五十音順・敬称略

（50口）勝山　學
（10口）西田さい雪・西田梅女
（5口）瀬在光本・板垣柳子・駒形隼男・鈴木しどみ・安田畝風・安原　葉・山岸世詩明・安浄寺勉強会
（3口）今井芳子・川崎繁子・長徳谷とし・中村曜子・藤津方恵・藤原　哲・矢木桂子
（2.5口）赤島磨智子・飯貝恵秀・大橋美代子・奥　清女・桑原たかよし・辻美智子・仲谷美枝子・堀口紀子　牧野菊生　松本慶子・村上　雪・田野井かづを
（2口）荒谷みえ子・石名坂房枝・小川則子・笠原佐千子・小島藍女・小林貞子・坂井一二三・関口智実・高城玲子・中川外代子・中村珠栄・幡生啓子・堀口道子・牧野妙子・松本寿憲・宮澤正・向佐ち子・村上秀吾・森田康夫・八百恵子
（1.5口）青木福太郎・浅井和子・井出節子・榎本清津子・大矢あきこ・小川のぶ子・折橋紀与美・岸本佐紀子・北川まつ子・北七喜美子・佐藤文子・佐藤美春・佐藤ゆきな・清水順子・鈴木恵子・鶴見昭子
（1口）中川茂子・西登美枝・西本ゆき・橋詰シズエ・藤井敏子・藤田暁夫・松田とも子・水橋眞智子・宮澤澄明・宮下末子・安井里子・有川　寛・伊東弥太郎・稲田節子・岩崎晃嗣・岩本松江・大井悦子・大岸敬明・岡山幸子・梶井より子・片桐久恵・加藤公男・金谷優子・岩本松江・大井悦子（1口）大岸敬明・岡山幸子・梶井より子・大井悦子・片桐久恵・加藤公男・金谷優子・金子慶一・金箱一世・川口俊子・岸本幸子・北　重子・木幡嘉子・小林つくし・坂井令子・坂本雪峰・佐野皐月・篠島安子・清水節子・白根寿子・瀬古祥子・高橋真理子・高畑和子・田上眞知子・武田律子・田代草猫・多田みす枝・辰巳葉流・田中裕女・谷口由美子・為永香月枝・辻　文江・出島達子・内藤　孝・永井佐和子・中田康子・中野幸枝・中村直美・中村礼子・西澤ひろみ・西野久仁夫・野村玲子・橋本紀美子・橋本正乃・畑中節子・林惣峰・林智子・早瀬貞子・平野孝純・福島広秋・堀なでしこ・本田輝代・正藤宗郎・松田　勲・松本洋美・松本れい子・守作青暢・丸山ま美・三島由紀子・宮前速男・宮村啓子・宮村美紀・村本寿美枝・矢島三枝子・山井きなこ・山岸清佳・山口やすか・吉田洋子・米田玲子

お願い
北信越支部への協力金

昨年も多くの方からご協力をいただきお御礼申し上げます。北信越支部の活動資金は皆様の協力金という名の会費に依っています。今年度も同封の趣旨をご理解いただき、絶大なるご協力をよろしくお願い申し上げます。

○協力金　一口　三千円　何口でも結構です
○期　　日　9月末日
○振込は　振込用紙でお願いします
○振込番号　００６５０－６－３８７０
○加入者名　日本伝統俳句協会　北信越支部

令和６年度　日本伝統俳句協会　北信越支部役員

役職	氏名	所属県	役職	氏名	所属県
顧問	安原　葉	新潟県	新潟県部会長	小川　のぶこ	新潟県
顧問	駒形　隼男	石川県	事務局長	蔵品　泰治	新潟県
顧問	瀬在　光本	長野県	副事務局長	宮澤　正	新潟県
支部長	藤原　哲	新潟県	会計担当	榎本　清津子	新潟県
副支部長兼長野県部会長	鈴木　しどみ	長野県	会計監査	高城　玲子	富山県
副支部長兼富山県部会長	荒木　かづを	富山県	会計監査	大橋　美代子	石川県
石川県部会長	森田　康夫	石川県			
福井県部会長	山岸　世詩明	福井県			